特別講演

毛利元就と陶晴賢

大内文化研究会代表　山本一成

陶晴賢について

今年のＮＨＫ大河ドラマは『毛利元就』であり、山口県人としては久しぶりに身近な題材を楽しむことができる。

毛利元就は安芸国吉田（現在の広島県吉田町）の小領主から身を起こし、中国地方一〇か国を平定したが、その過程での最大の難局は天文二四年（一五五五）陶晴賢を破った厳島の戦いであろう。

陶晴賢は若山城（現在、新南陽市）に拠る周防守護代であったが、天文二〇年（一五五一）守護大内義隆を山口から追放して自刃させ、義隆の甥大友晴英（後の大内義長）を擁立して大内氏領国を支配した。

陶晴賢は若い人にはなじみが薄いが、年配の人には大内氏を滅ぼした「逆臣」として知られ、皇国史観の盛行した戦前においては、平将門、足利尊氏らとともに悪名の高かった人物である。戦後、実証的・民主的な歴史学が発展し、中央では平将門や足利尊氏に対する評価が見直されてきたが、山口県では陶晴賢に対する評価はほとんど変わっていないように思われる。

ＮＨＫ大河ドラマにおいても、昭和五一年の『風と雲と虹と』は平将門を逆臣としてではなく、中央の政治権力の専横に対抗して地方住民の生活と権利を守ろうとした英雄として描かれていた。

また、平成三年の『太平記』は後醍醐天皇と対立し

た足利尊氏を、武士階級に支持されて室町幕府を開いた大人物として扱っていた。今年の大河ドラマ『毛利元就』では、陶晴賢は従来通り「逆臣」として描かれるのか、それとも新しい見方が出されるのか、興味のあるところである。

陶晴賢の人物像について、香川正矩著『陰徳太平記』の記述を取り上げてみたい。

天文九年（一五四〇）、尼子氏に属していた毛利氏が大内氏に寝返ったことに憤激した尼子晴久が、約三万の大軍で吉田郡山城を攻略し、毛利元就が籠城して対抗した時のことである。戦況を見守っていた大内陣営の中にあって、毛利氏救援を主張したのが陶隆房（後の晴賢）であった。

『陰徳太平記』はこのときの軍議の模様を描いているが、陶隆房は「義を見てせざるは勇なきなり」と述べて、義を知ることの重要性を強調し、他の武将を説得している。その結果、陶隆房の率いる約一万の援軍が派遣され、尼子軍を撃退することができたが、この援軍がなかったなら、毛利氏の運命は変わっていたかもしれない。

尼子軍撃退後、勢いに乗った大内義隆は、尼子氏の本拠・月山富田城を攻めるべく出雲遠征を敢行したが、難攻不落の富田城を攻めきれず、天文一二年（一五四三）五月、退却を余儀なくされた。

『陰徳太平記』には陶隆房が米を買って兵士に食わせ、自分は魚のはらわたを食べて飢えをしのいだというエピソードが出てくる。著者の香川正矩は岩国吉川家臣であり、毛利氏の立場に立つ史書にもかかわらず、陶隆房を名将として描いている点に注目したい。

このように、陶隆房は実直にして勇敢であり、部下に対する思いやりもある人物であった。彼は周防各地の地侍や農民との結び付きが強く、大内氏の苛政に対して地域住民の生活を防衛しようとした武将であった。天文二〇年八月末、山口を攻略した時、約五千騎が参集したが、いかに彼が多くの人々の支持を得ていたかが分かる。

平将門、足利尊氏、陶隆房（晴賢）らに共通するのは、中央の政治権力に背いてまでも、領民の生活と権利を守るために主体的に行動したという点である。

江戸時代、わが国においては主君の命令は絶対であり「君は君たらずとも臣は臣たれ」と、いかなる命令にも従うことが要求された。この上意下達の風潮は、明治以後もあらゆる面に引き継がれてきた。主体的に活動した平将門、足利尊氏、陶晴賢らが「逆臣」とされたゆえんである。

しかし、時代は変化していく。「地方の時代」や「個人の確立」が課題となっている今日、戦国武将の評価にも新たな視点が求められるのではないだろうか。

毛利元就の仇討ち

天文二四年（一五五五）の厳島の戦いは、中国地方における天下分け目の一戦であった。この戦いで陶晴賢を破った毛利元就は、以後、一気に上げ潮に乗り、弘治三年（一五五七）、大内義長を滅ぼして周防・長門を制圧し、さらに、永禄九年（一五六六）、尼子氏を倒して中国一〇か国に覇をとなえることになった。

厳島の戦いは、合理主義者で堅実を旨とする毛利元就が、彼の生涯の中で唯一の大きな賭けに出たものであるが、この戦いは陶晴賢に倒された大内義隆の仇討ちをしたというのが通説になっている。したがって、大義名分は毛利元就の側にあり、善玉の元就が悪玉の陶晴賢を成敗したという解釈が行われてきた。しかし、実際はどうであったのだろうか。毛利元就と陶晴賢の関係を史実をもとに検証してみたい。

毛利元就と陶隆房（後の晴賢）の最初の出会いは、天文九年（一五四〇）の郡山籠城戦であった。前に述べたように、大内氏の援軍によって毛利元就は苦境を脱することができたが、毛利氏救援を主張し、約一万の援軍を率いて安芸国吉田に到着し、尼子の大軍を撃退したのが陶隆房であった。以後、毛利元就と陶隆房の関係は親密なものになっていくのである。運命の巡り合わせとは皮肉なものである。陶隆房はこの毛利元

就に一五年後の厳島の戦いで討たれることになろうとは知る由もなかった。

出雲遠征敗退後、大内義隆は政治・軍事を怠り、専ら学芸と遊興に日を過ごすようになった。大内家臣団の間には陶隆房を中心とする武断派と相良武任を中心とする文治派の対立が深刻となった。毛利元就が山口を訪れたのは、陶隆房が相良武任らの文治派に傾く主君大内義隆に謀反を企んでいるといううわさが流れる頃であった。

吉田郡山御城下古図（山口県文書館所蔵）

天文一八年（一五四九）二月から五月にかけて、毛利元就は長男隆元、二男元春、三男隆景とともに山口に滞在した。この間、元就は大内義隆をはじめ陶隆房、内藤興盛らの有力武将と盛んに交歓している。

「吉田物語」によると、毛利父子の山口滞在中、長門守護代内藤興盛の息女を大内義隆の養女として毛利隆元へ嫁がせるという縁組が整い、また、周防守護代陶隆房と元就の二男元春とが義兄弟の契りを結んでいる。

「相良武任申条々」によると、「毎夜、隆房かち（徒歩）の者忍び候て、毛利旅宿へ文箱を持ちかよひし由」とあり、毛利元就と陶隆房の結びつきが進行していることを憶測させる。

毛利元就が安芸に帰国して、周防・長門では陶隆房、内藤興盛、杉重矩（豊前守護代）の協力体制が進み、翌、天文一九年（一五五〇）には「陶・内藤・杉が合

意して、主君大内義隆を退かせ、その子義尊を擁立するので援助を頼みたい」という密書を元就に送っている。

天文二〇年（一五五一）八月末、陶隆房は富田若山城（現在、新南陽市）で挙兵し、約五千騎で山口を攻略した。大内義隆は山口を脱出して深川（現在、長門市）の大寧寺まで逃れて自刃した。このとき、毛利元就は大内義隆の要請にもかかわらず援軍を送らなかった。そればかりか、陶隆房の山口攻略に呼応するかのように元就は安芸国の大内領を侵犯している。

大内義隆亡き後、天文二一年（一五五二）四月、尼子晴久が出雲・伯耆など八か国の守護に任命され大勢力となった。尼子氏に対抗するため、毛利元就は陶晴賢と結び、共同戦線を張って尼子方の諸城を攻略した。天文二三年（一五五四）五月、郡山城で反旗を翻すまで、毛利元就は陶晴賢と協力関係にあった。これは大内義隆が自刃して二年八か月という長い期間であった。

天文二四年（一五五五）一〇月、厳島の戦いで陶晴賢を破った毛利元就は、次いで弘治三年（一五五七）四月、大内義長を長府に追撃して自刃させ、大内氏の命脈を絶った。また、同年秋、大内氏の残党が大内義隆の忘れ形見である問田亀鶴を擁立して山口の障子ケ岳で挙兵したが、元就はこれを鎮圧し、亀鶴をも殺して大内氏を再興しなかった。このような経緯をみると、元就が大内義隆の仇討ちをしたという見方は成立しないのではないだろうか。

安芸吉田の小領主から中国一〇か国を支配する大名にまで台頭した元就は、戦国時代を実力で勝ち抜いた英雄であった。しかし、実力は野心と見られて容認され難く、人心を収攬するためにはある権威が必要であった。

防長の民にとっては、伝統的な支配者は大内氏であるという観念が強く、安芸から侵入した毛利氏は簒奪者としか映らないから、仇討ち説を捻出しなければならなかったのであろう。

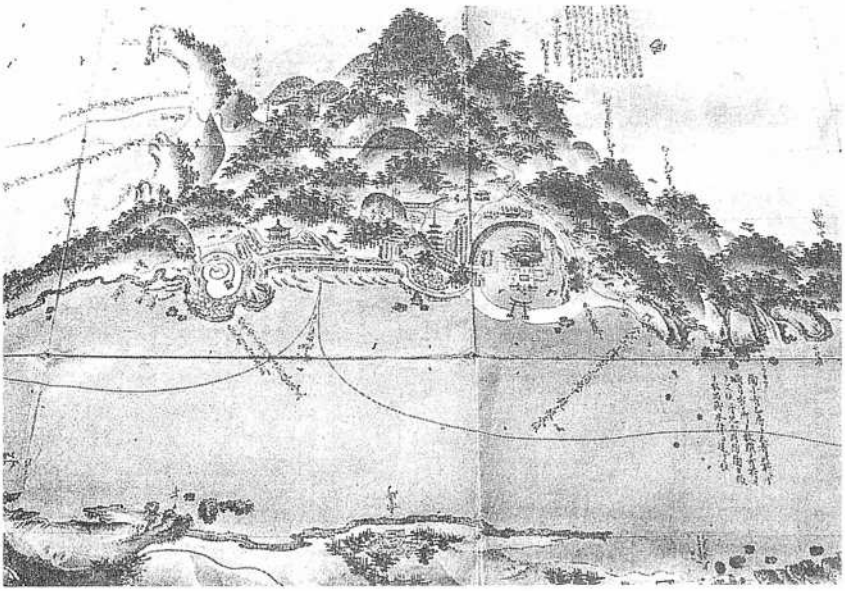
新しく防長の支配者となった毛利氏にとっては、陶

晴賢は「逆臣」であり、逆臣に擁立された大内義長は「偽主」でなければならなかったのである。

天文二〇年（一五五一）の政変により、新しい権力者となった陶隆房（後の晴賢）の勢威は防長を圧した。『大内義隆記』には、「フカキ御恩ニ預リシ侍ドモモ、今ハ早義隆ノ御身ノ上ヲ悪敷様ニ思ヒツヽ、御当代ノ御意ニハアハムトスル事ドモハ当時ノ習トコソ聞エケレ」とあり、昨日まで大内義隆に仕えた者が、今日は旧君をあしざまに言いながら新君に仕える有様を描いている。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」というが、陶晴賢が逆臣となるのは、天文二四年（一五五五）、厳島の戦いで毛利元就に敗れた後のことである。

歴史上の人物の評価は時代によって変わっていく。したがって、厳島の戦いで、毛利元就は善玉、陶晴賢は悪玉という先入観を排し、戦国武将の互角の戦いとしてとらえるべきではないだろうか。



厳島合戦絵図（部分）（山口県文書館所蔵）

おわりに

一六世紀半ば、戦国時代の防長（現在の山口県）では、大内氏から陶氏へ、さらに毛利氏へと権力者が交替した。大内義隆、陶晴賢、毛利元就の三武将はそれぞれに個性的で、よく生き、よく死んでいった人たちであった。私は昭和五八年より稿を起こし、この一〇数年、史実をもとにあれこれと思いをめぐらし、この三武将を主人公にして自ら楽しみながら歴史小説を書いてきた。

そのうち前半の部分は、平成二年六月、新人物往来社より『大内義隆と陶晴賢』と題して出版され、読者より大きな反響があり、好評をいただいたことを有難く思っている。

『大内義隆と陶晴賢』は天文二〇年（一五五一）九月の大内義隆の自刃までを描いたが、『毛利元就と陶晴賢』はその続編で、大内義隆の自刃後から弘治三年（一五五七）四月の大内義長の自刃までを描いている。

防長では長い間、大内義隆は怠け者で、遊蕩にふけって家臣に背かれた暗愚の大名であり、陶晴賢は主君を殺して権力を簒奪した逆臣であり、毛利元就は正義感の強い立派な武将で、中国一〇か国を統一した英雄として礼賛されてきた。

ところが、これは勝利者である毛利氏の立場に立った歴史解釈や人物評価であり、公正さを欠くものと思われる。敗者である大内義隆や陶晴賢は実際以上に悪く、勝者である毛利元就は実際以上に良く評価されてきたのではないだろうか。

立身出世主義、勝利至上主義を人生の目的とする我が国では、成功者は手放しで礼賛し、失敗者は頭ごなしに否定する傾向が見られる。ところが、人間にはさまざまな側面があり、単純に勝者は是、敗者は否と割り切ることは難しいのである。

私は史実をもとに公正な立場から、この三武将を追求し、長所と短所の両面から描こうと試みた。

ＮＨＫ大河ドラマは『毛利元就』では、長い間、防長の地で培われてきた勝利者の立場からの一方的な歴史解釈や人物評価ではなく、転換期である現代からとらえた新しい視点、構成によって作られた内容がテレビを通じて全国に放映されることを期待している。

「死人に口なし」と言われ、敗者の弁明はたわごとして無視されるものであるが、一六世紀半ばの防長の歴史を鮮やかに彩った大内義隆、陶晴賢、毛利元就の三武将が正当に評価され、それぞれの位置を占めることを願っている。

二〇世紀末の今日、人間の欲望が肥大化し、競争が激烈となって、社会は危機的状況に陥っている。いかにして欲望をコントロールし、競争社会から共生社会への転換を図るかが大きな課題ではないだろうか。この歴史小説は戦国時代に題材を取り、歴史を手がかりとして現代社会がかかえる問題を考えようとしたものである。

山本一成（やまもと　かずしげ）

略歴　一九三六年、防府市に生まれる。
広島大学大学院修士課程修了
三五年間、山口県下の高校で歴史を教え
一九九六年、定年退職
現在、大内文化研究会代表
著述、講演、生涯学習講座の講師
などの活動を行う。

著書　『大内義隆と陶晴賢』
『毛利元就と陶晴賢』
『歴史随想　大内文化』
『大内文化散歩』『毛利元就と山口』
『目で見る大内文化』

現住所　山口市錦町四―一一

電話　〇八三九―二四―四一六〇